
Lora's trip

Blue Noah

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o r a ' s t r i p

【Nコード】

N 1 3 5 1 X

【作者名】

B l u e N o a h

【あらすじ】

原因不明の災害で崩壊しようとしている世界。探検家のカイリユー・ローラは、災害の真相を探るために旅に出る。様々な出逢いや経験を重ねる中、最後に辿り着く真実とは
ポケダンベースのオリジナルストーリー

Exploration・1 ローラ(前書き)

なんとか書くことが出来ました。小説に関する調べ事をしていてこんな時間に。

本当は効率よく更新をするためにストックを幾つか作っておきたかったのですが、サイトにも慣れたので1話だけ投下しておくことにします。

Exploration・ローラ

木々が生い茂る森の中。葉の隙間から日光が、地面の土や枯れ葉、雑草を照らしている。葉が風に揺られて擦れる音。風が吹き抜ける音。

様々な環境音が聞こえるが、そのポケモンにはそんなものに聞き入っている余裕はなかった。

細長い胴に短い手足、茶とベージュの縞模様を持つそのポケモンはオオタチという種族であった。その身体は酷く傷ついており、苦しげに呻き声を漏らしている。

オオタチは森の中に食物を取りに来たところを、近くに住む野生ポケモンに襲われた。派手にやられてしまったため動くことなど出来るはずもない。

自分以外にも、この森を訪れる者はいる。だがこんなときに限って　運が悪かった。

もしかすると、自分はこのまま　。ふと頭に過ったその予感、少しずつ現実になりつつあった。

「ん？　てめえ、何オレの縄張りで昼寝してやがる？」

何処から現れたのか、オオタチに話しかけてきたのは、スズメバチの様な姿で腕に大きな針を持つポケモン、スピアー。少なくとも有効的な相手ではない。

「ち、違います！　僕はこの森に食べ物を取りに来て、それで森に

すむポケモンに襲われて……」

力を振り絞りオオタチは必死に事情を説明する。もしかするとこれで理解してくれるかもしれないと、僅かな希望を抱きつつ。

「てめえが誰に襲われようがオレには関係ない。それより、俺の縄張りで食糧探した？ それは見逃すわけにはいかねえな」

しまった。これでは逆効果ではないか。スピアーの腕にある針を向けられながら、オオタチは後悔の念に駆られた。しかし既に後の祭である。スピアーが針をこちらに向けてゆつくりと近づいてくる。そして一気に間合いを詰め、その針で突き刺そうとした 刹那

突如、辺りを強い風が包み込んだ。同時に、突然現れた大きな影にスピアーが吹っ飛ばされ、オオタチは思わずその場に伏せる。大きな影はオオタチに背を向けたまま、起き上ろうとするスピアーに構えている。

「だ、誰だてめえ！ コイツの仲間か！？」

スピアーは大きな影に叫ぶ。オオタチが顔を上げると、そこに居たのはとても大きなポケモン。

大きな山吹色の身体に太い尻尾、頭には帽子を被っているが角と触角の様な器官が二つ見えており、そして背中からは大きな身体には少し小さめの翼が一对生えている ドラゴンポケモンのカイリユードだった。頭には探検帽、首には赤いスカーフを巻いており、肩からはトレジャーバッグと呼ばれる鞆を掛けている。

先ほどの風はこのカイリユードの翼から発生したもので、スピアーを吹っ飛ばしたのもこのカイリユードだろう。

「私？ 私は見ての通りカイリユーだよ。それより、君は何でこのオオタチ君を攻撃してたの？」

「見ず知らずのてめえには関係ねえだろ！ オレの縄張りに勝手に入ったコイツが悪いんだ！」

いきなり現れ、口出ししてくるカイリユーにスピアーは苛立っていた。口調はかなり荒く今にも襲いかかってきそうな雰囲気だ。

「確かにそうかもしれないけど、このオオタチ君は怪我をしてるよ？ それなのに攻撃するの？」

「うるせえ！ てめえに何が分かる！」

ついに、スピアーが動いた。その針をオオタチからカイリユーへと向け、一直線に迫ってくる。だが、スピアーはこの後敗北することになる。二つの針がカイリユーの数センチ手前まで迫った時、突如カイリユーの姿が消え、背後に現れたのだから。

「本当は話し合いで分かってもらいたかったんだけど……ごめんね」

一言、カイリユーはスピアーに謝った。その直後、スピアーは糸が切れた操り人形のように倒れこむ。

スピアーの針が迫った時、カイリユーは“こうそくいどう”でスピアーの背後に回り込んだ。そしてそのスピードを維持したまま、スピアーの急所に“ドラゴンクロー”を叩きこんだのだ。

「君！ 大丈夫!？」

スピアーが動かないのを確認すると、カイリユーはすぐにオオタ

手に駆け寄った。オオタチは先ほどのやり取りでまだ啞然としており、カイリユールの問いかけに反応するのに少々時間を要した。

「えっ、あ。は、はい……」

そう答えるが、相変わらず傷は痛む。それを見たカイリユールはトレジャーバッグからある物を取り出す。

「はい。これ、オボンの実。これで少しは余裕が出来ると思うからオオタチは受け取ったオボンの実を口に運び、少しずつ飲み込む。オレンの実に似た、様々な味が口に広がる。

「あ、ありがとうございます。少し楽になりました……」

「うん、よかった。とにかくこの森から出よ？ 私が運んで行くから」

カイリユールはオオタチを腕で抱え上げ、背中の翼を広げる。

「そういえば、あなたの名前は？」

よく考えると、まだ名前を聞いていなかった。オオタチはカイリユールに名前を問う。

「あっ。まだ名前、言ってなかったね」

翼を何度か羽ばたかせ、カイリユールがオオタチの方へ顔を向ける。

「私はカイリユールのローラ。よろしくね」

笑顔でそう名乗ったカイリユ
舞い上がった。

ローラは地面を蹴り、空へと

Exploration : i ローラ(後書き)

うむむ……小説を書くのも結構難しいです。これから頑張ります。

Exploration・2 依頼

「助けていただいて、本当にありがとうございます！」

「お礼なんていいよ。困った時はお互い様でしょ？」

頭を下げて感謝するオオタチに対して、笑顔でそう返すカイリユ一のローラ。オオタチを森 “樹海の森” から連れ出した後、ローラは一番近くにある小さな町、“レストタウン” へと運んだ。“樹海の森” の周りは草原に囲まれており、その草原を西に向かったところにその町はあった。

オオタチの怪我は見た目ほど重症ではなかったらしく、町の診療所で手当てをする程度で済んだ。その診療所で、手当てを終えたオオタチがローラにお礼を言っているところである。

「あつ、そうだ。よければこれ、受け取ってください」

一体何処から持ってきたのか、オオタチが木の実が沢山盛られた大きなバスケットを差し出してきた。ポピュラーなものから少々珍しい物まで、色鮮やかなさまざまな木の実が入っている。

「えっ？ う、受け取れないよ。こんな立派なもの……」

依頼を達成したり、救助をしたときにはお礼として品物やお金を受け取れることはごく当たり前のこと。しかし、これはあまりにも大袈裟すぎる。ローラとしては当たり前のことをしただけなのに。

「いえいえ。僕はこの町で木の実屋を営んでいますので、この程度は……。それに、もしあの時貴方が助けてくれなかったら、僕はど

うなっていたか分かりません。だから、このくらいお礼はしないと」

「それじゃあ、ありがたく受け取っておくね。本当にいいの？」

ローラはオオタチからバスケットを受け取る。しかし、やはりまだ遠慮してしまう。

「遠慮しないでください。それじゃ、僕はこの辺で失礼しますね。本当に、ありがとございました！」

再び深く頭を下げ、オオタチはお礼を言ってその場を後にした。

*

翌日 レストタウン

月が地上から姿を消し、入れ替わりに朝日が地を照らす。朝が訪れた町は少しずつ活気づいていく。

ローラの自宅はレストタウンにある。身体のかなんな種族だけあって家は大きく、石造りの二階建てになっている。

朝日を浴びて、ローラは寝室で目を覚ました。意識が完全に目覚めないまま、洗面所で顔を洗う。食事を済ませ、彼女は仕事の準備を始めた。

探検家の仕事と言っても、いつも未開の地を冒険したりお宝を探したりするわけではない。普段は依頼を引き受けたり、遭難したり襲われたりしたポケモンを救助等、困っているポケモンの手助けが仕事である。

今日の仕事は、以前から予定に入っていた依頼。内容は、依頼人である新米探検家の探検のサポート。レストタウン西部にある山岳地帯を、探検家成り立ての新人と登山するというもの。

早々と支度を済ませ、ローラは家を出た。夜に雨が降っていたのか、地面が全体的に濡れている。

依頼人はレストタウンの北部にある川沿いの町に住んでいる。そこまでは約2キロで、カイリユールであるローラならばすぐに着く距離である。

翼を広げ、何度か飛ばたかせて動きや風の具合を確かめる。そしてタイミングを見計らって地面を蹴り、同時に翼をより強く飛ばたかせ、彼女は朝焼けの空へ飛び立った。

*

十数分飛び続けると、やがて大きな川が目に入る。そしてその近くに依頼人の住む町 ノースリバータウンがあった。

ローラは高度とスピードを下げ、町の中央に降り立つ。人通りはそれなりに多く、種族が種族の為やはり目立つ。しかしそんな人目は気にせず、集合場所である町役場へと足を進めた。

「あつ。あれかな」

町役場の近くまで行くと、役場前のベンチに一匹のポケモンが座っていた。

黄色い体色をもつネズミに似たそのポケモンは“ピカチュウ”と呼ばれる種族である。頬には電気袋と呼ばれる赤斑点の様な電気を生成する器官があり、稲妻の様なギザギザの尻尾、耳は先が黒くなっている。

依頼人の種族はピカチュウ。集合場所である役場前に居て、トレジャーバッグを掛けているため間違いないだろう。

「ねえ、ちょっといいかな」

「え？ お姉さん誰？ あ、もしかして……」

近寄って声を掛けたローラに、ピカチュウは振り返って首を傾げる。身長差があるため少し見上げるようにして。

「うん。私は探検家のローラ。君がテイル君？」

こちらの種族名と名前は伝えてある。相手は依頼人ならば、これで分かるはず。ちなみに“テイル”とは依頼人の名前である。

「うん。はじめまして、ローラさん。僕がテイルだよ」

「はじめまして。確か、“探検家養成所”を出たばかりだったっけ？」

「そうだよ。だからまだ一匹であちこち行ったりするのは、ちょっと怖くて……」

“探検家養成所”とは、探検家や探検隊を志望する者がそれに必要な知識や技術、そして力などを身につける施設である。

探検家になるには“ポケモン探検隊連盟”に申請を行えば誰でもなれる。しかし、当然素人が技術も力もなしに探検活動をするにはリスクが伴う。その為多くの志望者は、養成施設や腕のある探検家の下で修行をすることが多い。

「それは誰でも一緒だよ。まずは、今日の行く所を確認しようか」
「分かった。今日は此处から南西にある山岳地帯を登るんだ。そこは初心者にピッタリだって聞いたから」

「ああ、あそここの山なら私も何度か登ったから知ってるよ。そんなに厳しい山じゃないから、初心者のティール君には丁度だと思うよ」
ティールの言う山岳地帯は、ローラの住むレストタウンの西に位置する。標高は高すぎず低すぎずといった感じで、傾斜もなだらかな場所から急な場所まであるため経験の浅い者にはもってこいの山である。

「それじゃ、荷物を確認して行こうか」

「うん！」

一緒に登るのが楽しみなのか、ティールはやや嬉しそうに答えた。装備や道具などを確認し、ティールを背中に乗せたローラは目的地の山の麓へと飛び立った。

*

目的地に到着し、登山を始めて数十分。二匹はなだらかな傾斜を登りながら、探検話に花を咲かせていた。

「ねえ。ローラさんは探検隊ランクはどれくらいなの？」

「今はゴールドランクだよ。私の友達はダイヤモンドランクなんだ

けどね」

「へえ〜。凄いなあ」

ローラの話に、目を輝かせて聞き入るティール。新人の彼にとって、経験者である彼女の話には興味があるのだろう。ちなみに彼の“凄いな”という言葉は、ローラのゴールドランクではなく友人のダイヤモンドランクに対しての言葉である。

「ハア……ハア……あ、橋だ！」

やや急になってきた坂を登っていると、目の前に谷に掛かった橋が現れた。橋は鉄製だが、かなり古いものらしく大部分は錆付いて穴が空いている箇所もあった。身体の小さなティールは問題ないのだが、ローラは別である。

カイリユーの平均体重は三桁。彼女が平均より上か下かは分からないが、この錆付いた、ボロボロの橋が、その身体を支えられるとは到底思えない。

「ど、どうする？ ローラさん」

どうやらティールも、彼女が渡れるのかと思っていたらしい。もちろん、そんなことは彼女自身が既に理解している。

「うーん……」

少し考え込む仕草をしながら背中の中を見る。ティールを乗せて向こうまで飛ぶことはできる。だが、出来ればそれはしたくない。

横に目を移すと、そこには遠回りの道があった。時間は掛かるがこちらでも行ける。ルートがあるのだからわざわざ翼を使う必要は

ない。

「ねえ、ティール君。遠回りになるけど、こっちもに道があるからそっちにしない？」

「いいよ。ローラさんの翼で飛んで行ったら楽だけど、それじゃつままないもんね」

彼女の気持ちを理解したのか、または同じことを考えていたのか、ティールはそう言った。

身体を脇道に向け、二匹は歩き始めた。

そして、この道の選択が誤りだったと思いき知らされるのは、それから数十分後の事だった。

「ねえ。もう半分くらい来たかなあ？」

「ええ。あと少しだから、頑張る」

その刹那、二人の足は地面の異変に気づいた。その異変 揺れは少しずつ大きくなり、二人は立っていることが難しくなる。

それは、地殻の内部のプレートが断層を境目にして大きくずれ動く地殻変動の一種 地震である。

やがて揺れは収まった。余震の危険もあるが、大きなものは過ぎたようだ。

「ふう……治まったのかな……？」

突然の地震にテイルが不安げに眩く。それを落ち着かせるようにローラは言った。

「と、とにかく山を降りよう。このままだと土砂崩れとか起きるかもしれないから」

「う、うん……」

テイルを背中に乗せ、ローラは翼を広げる。飛び立とうとした、その時だった。

「っ!？」

突如として辺りに響く大きな音。ふと背後を見てみると、自分たちに向ってくる木々や土砂、そして岩。恐れていたことが起きてしまったのだ。

昨夜の雨で地盤が緩んでいたのか。となると、他の場所でも起こる可能性はある。土砂が迫る中、彼女は咄嗟に谷の下へと飛び降りた。

「掴まって!」

背中に乗っているテイルに叫び、ローラは速度を上げる。あの時上昇する事も出来たがそんな余裕はなかった。とにかく土砂を振り切り、安全な場所まで。

前を見ると横から、そして前方からも土砂や岩が流れ込んできている。あの錆付いた橋も崩れ、破片が落ちてきている。

「振り落とされないようにしっかり掴まって!」

土砂や破片を避けるためにローラは回避運動を取る。バレルローラや急旋回で障害物を避け、その都度ティールは振り落とされそうになる。

さすがはカイリユーと言ったところか。身体を上下左右に振り回されながらティールは思った。その刹那、彼の目の前に大きな樹木が

「うわっ!？」

彼に樹木が直撃しそうになった時、咄嗟にローラが回転を掛けた。おかげで彼に樹木が直撃することは無かった。

「ティール君！ 大丈夫!？」

「な、なんとか……」

散々振り回された為か、ティールは少しぐったりとしている。

「い、ごめん。酔っちゃった?」

「少し……」

幸い、もう土砂崩れは治まったらしい。十分に高度を上げ、涼しげな風を彼に当てながらローラは彼の住む町へと飛行を続けた。

Exploration 3 世界の“今”（前書き）

少々遅れましたが更新です。

途中で集中力が切れたため後半の文は酷いモノになっています。ご了承ください。

Exploration・3 世界の“今”

「はい。着いたよ」

やがて、テイルの住むノースリバータウンへと到着した。背中に乗せている彼をゆっくりと下ろす。

「ごめんね。危ない目に遇わせちゃって……」

「ううん。ローラさんは悪くないよ。むしろ、ローラさんと一緒に行ってなかったら僕は今頃ここにいなかった。謝られるよりお礼が言いたいよ。ありがとう！」

申し訳なさそうに頭を下げるローラに、彼は言った。

「フフツ、ありがとう」

彼の優しさに、ローラの顔に笑顔が浮かんだ。
だが、依頼は失敗したようなもの。何かお詫びがしたい。そう思ったローラはあることを思いついた。

「ねえ。もしよかったら、丁度昼過ぎだしお昼ご馳走するよっ。」

「い、いいの？」

「うん。依頼は失敗しちゃったからお詫びのつもりで。どうかな？」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

「おいしいー!」

ローラの奢りおごりということで、二匹は近くの料理店に入った。適当な料理を注文し、少し遅めの昼ご飯となった。

「私はときどき依頼とかでこの町に来るから、その時はいつもこの店で食べてるの。ティール君は？」

箸で料理を口に運びつつ、彼女はティールに聞いた。

「うーん……金銭的に外食はあんまり出来ないんだ。こんな機会がないと外で食べることはあまりないよ」

コップに注がれた冷えたお茶を飲み、そう答えた。

十数分して食事を終え、ローラが会計を済ませて二人は外に出た。

「ありがとう、ローラさん。本当によかったの？」

「ええ。ほんのお詫びだから、気にしないで」

優しく微笑んでそう返し、ローラは翼を広げる。

「じゃあまたね、ティール君。またどこかで会えるといいね」

「うん。色々ありがとう、ローラさん」

ティールに別れを告げ、彼女は空へと舞い上がる。そして南へ

レストタウンへと飛び去って行った。

レストタウンに戻ると、ローラは町の図書館へと向かった。

その図書館はそれなりに大きな作りで、本も様々なジャンルの物を取り揃えている。さらに情報収集用としてインターネット接続が可能な端末も用意されており、ハイテクな図書館であつたりする。

彼女が向かったのは“地質”の本棚。そこから『地震学の全て』、『地震のメカニズム』、『地殻変動とプレート運動』等といった地震に関する本を取り出し、中央の机にどすんと置き読み始める。

「……………」

内容を理解した上で選んだのか、片っぱしから取っていったのは分からないが、本の分厚さは並みのものではない。合計五冊の中で三冊目の半分まで達したところで、閉館30分前になってしまった。

残りの時間で二冊と半分を読むのはまず不可能。仕方ないので受付で貸し出し手続きを済ませ、家で読むことにした。

陽が傾き、空や地が夕焼けに染まる。町は買い物に出る主婦や我が家へ帰る子供たちで人通りが^{ポケ}多くなっていた。

反対方向から来るポケモンを避けつつ、ローラは自宅へと足を速める。図書館で借りた本はトレジャーバッグの突っ込んだのだが、あれだけの量を入れたにも関わらず全く膨らんでいない不思議な鞆かさは構造および製造方法はトップシークレット　なので特に嵩張かさばることもなかった。

やがて自宅が目視出来る所まで来ると、家の扉前で佇んでいる。一匹のポケモンが目に入る。

青い身体に真紅に染まった大きな翼。四足歩行だが西洋のドラゴンを思わせるような身体を持つそのポケモンは、ボーマンダと呼ばれる種族。ローラと同じくトレジャーバッグらしきものを掛けている。

(えっ。あれは……)

扉の前で前足を使ってノックしているボーマンダに、ローラは近寄って背後から声をかけた。

「ねえ。もしかして……ハーディン?」

「そうだが、こんなところ俺の名前を……おっ」

ローラの顔を見た途端、ボーマンダ　ハーディンの顔が変わる。驚いていた表情は嬉しそうなものへと代わり、笑顔が浮かんだ。

「フフツ。やっぱり。久しぶり、ハーディン」

「……嗚呼。久しぶりだな」

二匹は昔からの友人であり、探検仲間でもあった。会話からして

暫くぶりの再会らしい。

「三年ぶり、かな？ 私が引越したのがそれぐらいだから」

「そうだ。それ以来、全然連絡もしてないからな」

「確かに。あ、とりあえず入って。こんなところで立ち話を何だから」

家の扉を開け、ハーディンの中へ招き入れる。ローラ自身も身体
の大きな種族の為家は大きい。ボーマンダの彼が入っても窮屈きゆうくつでは
なかった。

リビングへ案内し彼は椅子に座らせてお茶を入れた。

「ところで、どうして突然こっちに？ 中央大陸に住んでたハズで
しょ？」

ハーディンの前に湯気の立つお茶を差し出し、ローラは反対側の
椅子に座る。

「嗚呼。こっちには依頼で来たんだよ。早めに入ったほうがいいと
思っ
て前日に来て、時間に余裕があったからお前に会いに来たって
ワケだ。こんな機会でもないと西大陸に来ることなんてないからな」

前足で器用に湯のみを持ち、中のお茶を口に含む。

「そう。最近そっちはどう？」

「やってくる依頼が増えたよ。それに最近、妙な地震やら嵐やらが
多くて参ってるよ」

「「妙な」？」

彼の言葉に、ローラに疑問が浮かぶ。昼間の地震と何か関連性がある気がした。図書館で借りてきた本も、それが気になって借りてきたのだから。

元々、この地方では滅多に地震は起こらない。ましてやあんな地震など、こちらに来てから一度も経験したことがない。

「嗚呼。季節外れの嵐に滅多に起こらない大地震……この前なんか、首都でデカイ地震が起こってよ。桁違いの被害が出たぞ。ん？知らないのか？」

驚きの表情をしているローラを見て、彼は問いかけた。まさか知らないなんて思っていなかった。

「う、うん。この町は住んでも不便なことはないけど、結構小さいし近くの町もそれほど大きくないから……どちらかと言えば田舎なの。私はテレビとかそういう類のものは持ってないし、新聞も探検新聞しか取ってないから……」

少し言いづらそうに、顔を下に向けて言った。一般家庭なら普通にあるはずの物が無いと言っただけだから当たり前か。

よく見てみると部屋には小さなテレビ一台もなく、パソコン等もちろん見当たらない。隅にあった電話は黒電話で、新聞紙が一枚、テーブルの傍に畳まれて置かれているだけだった。どうやらハイテク機器とは無縁の生活をしているらしい。

「え、えっと……とりあえずこれ読んでみる。結構興味深い事書いてるから」

少し反応に戸惑い、ハーディンは掛けてあったバッグから一冊の本を取り出し手渡す。『謎の災害に迫る』と書かれた二センチ程の厚さのその本は、有名な著者の書いたものだった。

「それにも書いてあるんだが、今世界中で原因不明の災害が起こってるんだ。そのせいで俺たち探検家や探検隊にも救助依頼が増えてるし、さっき話した依頼が増えたつてのも、九割が救助だ」

彼の口から語られる世界の“今”に、ローラは驚きを隠せなかった。自分の知らない間に、世界が大変なことになっていた。

そして、気がかりなこともあった。

「で、こっちはまだ被害は出てないみたいだな？」

「とりあえずはね。ただ、気になることがあつて……」

彼女は昼間の地震をハーディンに話してみた。この地方では地震は滅多に起こらないことも。

「あゝ。たぶん予想はしてると思うが、これから増えていくと思うぞ。地震に限らず色々な自然災害が」

「そう……」

出来れば当たってほしくないと思っていた予想が見事に的中した。これから増えていく。この時、彼女の脳裏にある考えが浮かぶ。何か自分に出来ないのだろうか？ 何が原因なのだろうか？ 不思議と行動を起こしたくなかった。

「まあ、俺の知ってることはこれくらいだ。お前も気をつけるよ」

そう告げ、ハーディンは席を立つ。

「どうしたの？」

「近くに予約してる宿があるんだ。確か“怨墓露”とかいう格安の宿だったな」

「か、格安宿の怨墓露ね……」

『怨墓露』と言う名の宿　ローラはそれを知っていた。とにかくボロく、深夜の一時から三時にかけてゴーストタイプのポケモンが宿泊客を驚かすとの噂のある宿である。

言うべきか、言わざるべきか。ほんの数秒悩んだところで、後者を選んだ。

「それじゃあな。俺は明日の依頼の後、数日こっちに居るから。また来るよ」

宿『怨墓露』へと向かうハーディンの背中を、ローラは無言で見送った。

Exploration・3 世界の“今”（後書き）

最後の宿『怨墓露』は執筆中に考えたネタです。今思えば何故こんなものを考えたのか分かりません。当然ですが、今話限りで次回には出ません。

ちなみに読みは“オンボロ”。

後書き 2011年10月30日修正

ハーディンを見送った後、彼女は図書館で借りた本や彼が貸してくれた本　忘れて置いていっただけかもしれないが　を読んてみたり、取っていた新聞の記事に目を通してみたりと、様々な方法で情報を集めていた。だが限られた資料の中で、そう多くの情報を得られるはずもなかった。

その前に、頭にすら入っていなかったかもしれない。ハーディンの話を聞いた時からずっと、ある事を考えていたのだから。

私に出来る事、なにか無いのかな……

なぜこんなことを考えるのか。それは彼女の性格から来るものである。昔から、ある物事に対して『自分に出来る事は無いのか』という思考を巡らせる事が多いローラ。つまりは“放っておけない”のである。

食事の時も、入浴の時も、そして就寝時まで考え続ける。それが彼女の特徴であり欠点でもあった。そして数時間に亘り考え抜いた結果、ある結論に到達した。それは

*

翌日

この日、ローラは依頼を少し簡単なもので済ませた。といつても普段から難しいものを引き受けているわけではないが、いつもと比べると若干手間の掛からないものを。

引き受けたのは『“樹海の森”から木の実を採ってきてほしい』という内容の依頼。“樹海の森”には凶暴なポケモンがときどき出現するため、戦闘に慣れた探検家などに依頼する者も少なくない。ちなみにこの依頼を出したのは、先日同じ森でスピアーに襲われた“あのオオタチ”である。

*

「はい。オレンの実五個と、オボンの実三個、マトマの実が四個にカイスの実が一個。それから……」

太陽が真上を通りすぎて間もない頃　ローラは依頼で頼まれた木の実を全て“樹海の森”で集め、依頼人であるオオタチへと届けた。

樹海、と呼ばれるだけあって相当な広さを持つその森では、様々な木の実を目にする事が出来る。この森にすむポケモン達は勿論、近隣のポケモンもしばしば木の実を取りに来る。時々、「此処は俺の縄張りだ！」等と言い乱暴をする輩も居るが。

「モモンの実が六個、ラブタの実二個……。これで正しいかな？」

「はい。合ってます。しかし、大変じゃありませんでした？　ちょっと頼みすぎてしまって……」

確かに、多い。頼んだ木の実の合計数は二十一個。さらに種類も多く、場所が場所だけに搜索範囲も広い。相当な手間を掛けてしまったのではと申し訳なく感じた。

だが、ローラは全然、と言い

「大丈夫。あの森にはよく行くし、何処に木の実がなってるのかも大体は把握してるから。それに、ほら。私には“コレ”があるでしょ？」

背中の一対の翼を見る。こんなときには空を飛ぶ手段があるほうが便利である。天候や体調などに左右されるが、広範囲を短時間で行き来する事が出来る。

「確かに、そうですね。僕は地面しか移動できませんから。では、お礼の三千ポケです。またいつか、お願いしますね」

用意していたお礼のためのお金が入った小さな麻袋を差し出し、オオタチはローラに頭を下げる。少し屈んで麻袋を受け取ったローラはそれをトレジャーバッグに入れ、最後にこう言った。

「うん。こちらこそ。じゃあ、またね」

*

オオタチと別れ、ローラは一度家に戻った。

一つ目は、三千ポケという彼女の金銭感覚では大金の一つか二つほど手前の金額のお金を自宅に置くため。たくさんのお金を持ち歩くのは防犯上危ないためである。

二つ目は、昼過ぎなので昼食をとるため。昨日外食だったので今日は自宅で自炊。

「何しようかな……」

キッチンに立ち、何をしようかと考えていると、テーブルに置かれた木の実のバスケットが目に入る。先日オオタチから貰ったもので、まだ手をつけていなかった。

「これでいいかな？」

バスケットから数個の木の実を取り出し、ローラは調理を始めた。

数十分後に出来上がったのは、味付けされたご飯の中に焼いたり炒めたりした木の実を交ぜたもの。

椅子に座り、早速料理を味わい

「っ！？」

突如として口から放たれる灼熱の炎。突然の事態に驚き、口内の“辛さ”を我慢し含んだものを思いだす。それは激辛木の実と呼ばれる マトマの実。

一口食べると強烈な辛さに襲われ、場合によっては痛みも伴うらしいその木の実は、炎タイプが食べると高確率で“火炎放射”を吐きだすという。

もちろんローラは炎タイプは持っていないが、“火炎放射”が使えるのか予想外の味だったためか、無意識のうちに技を出してしまった。

幸いにも焦げ目や火事にはならなかったが。

「な、何でこんなもの……」

マトマの実など、辛すぎてそのまま料理に使用する事は殆どない。

となると、考えられる原因は“間違っ て入れてしまった”以外に考えられない。

尤も、今の彼女にそんな思考が出来るとは考え難いが。

*

「おい。ローラ？」

ローラが悪魔^{マトマ}の実で“火炎放射”を吐いて、暫く経った頃。彼女の家を一匹のポケモンが訪れた。

来訪者 依頼を終えたハーディンは前足で扉をコンコン、と叩くが、家主^{ローラ}が出てきたのは数十秒後。どういう訳か赤く腫れた舌を垂れ下げている。

「い、一体どうした？」

「昼ご飯にマトマの実入れちゃって……」

“あの辛さ”がまだ残っているためか、喋り方が若干おかしい気がする。とにかく入って、とハーディンを招き入れ、彼にお茶を入れた。

「……なるほどなあ。だから舌が腫れてるのか」

前足で器用に湯飲みを掴み、中の温かいお茶を飲む。

ローラもコップに入れた冷水を口に含み、頷いた。

「甘党のお前にマトマの実なんて、相当ヤバかったんじゃないか？」

“ 火炎放射 ” まで吐くなんてかなり……”

「もう……ホントに死ぬかと思ったよ。そんなもの入れちゃったなんて思ってたから……”

会話からして、ローラは“ 甘党 ”らしい。つまり辛いモノなど殆ど食べず、むしろ苦手と思われる。それなら“ 火炎放射 ”を吐きだしてしまうのも無理はない。

はは、とハーディンが笑っていると、そうそう、とローラがあるモノを取り出す。

「この本。昨日忘れていったんじゃない？」

取り出したモノ 昨日ハーディンが置いていった本をテーブルに置き、彼の前に差し出した。

「ああ、この本ならやるぞ。実際、昨日あんな事言ってたが、その本読んで理解できたのは半分だけ。後は専門用語やら何やらでサッパリだ。

逆に、お前はそういうの好きだろ？」

「まあ……貰っちゃっていいの？」

「いいっていいって。俺が持ってたって役に立たん」

「それなら、遠慮なく……”

あげると言うのだから、いらないと言う訳にはいかない。所有権の移った本を片づけ、話の区切りがついたところで本題に入る。

「ねえ、ハーディン。私……旅に出ようと思うの」

「ほう。旅に……ハア!？」

単刀直入に放たれた“旅に出る発言”に、ハーディンは若干反応が遅れてしまった。冗談かと思っただが、彼女の表情を見るとそれは間違いであることに気付いた。

「な、なんで……そんな急に？」

「今……世界が大変なことになってるでしょ？ あなたの本を読んで、世界中のあちこちで大変な目に遭ってるポケモン達がいる。それを黙ってみてるなんて、私には出来ない。少しでも……ほんの少しでも、私にできる事をしたって」

それは彼女は悩みぬいた末に出した“答え”。

探検家として、そして彼女の性格からして、困っている者を見過ごすことなど到底できない。

だから、自分に出来る限りのことを 誰かを救うということをした
したい。

その為に、彼女はそんな決断をしたのだった。

「まあ……お前らしいといつかなんと……本気か？」

「うん。中途半端な気持ちじゃこんな事言わないよ」

「だが……今は世の中こんな状態だ。危険な目にだって遭うかもしれない。それでも……」

確かに、リスクはある。危機的状況に陥る可能性は、今の世界の状態を考えれば十分有りうる。場合によっては、死さえ考えられる。

「わかってる。危険があることは、昨日一晩中考えたから。それでも、探検家として、私は私に出来る事をやりたい」

彼女の決意は固かった。ここまで来てしまえば、もうローラは止められない。幼いころから彼女と親しかったハーディンがそれを一番分かっていた。

「お前の気持ちはよくわかった。なら俺も一緒にいく」

「えっ？」

自分も付いていく　ハーディンのその言葉は予想外だった。なぜ。ローラは聞き返した。

「な、なんであなたが？」

「女の一人旅なんて、何が起こるか分からん。危険つつつても変な輩に絡まれたりすることだってあるかもしれない。」

それに、何かあった時は一人より二人の方が良いだろ？」

つまりは、一人ではやはり危険だ、ということだ。確かに万が一の時は一人より複数の方が対処しやすい。一人ではできないことも、二人ならば状況は変わる。そう考えれば、単身で旅をするより彼がついて来てくれた方が助かる。

「でも、そつちにも色々予定とかあるんじゃない？ それにこつちには依頼で来てるんだし、帰りが遅くなるとあなたの家族も心配するだろうし……」

「家族には電話一本ぐらい掛けとくさ。こつちでの用事も早めに終わったし。別に嫌なら無理にはついていかんが……」

「……じゃあ。お願い、出来るかな」

「嗚呼。よろしくな」

差し出された手を握り返す……ことは身体の構造上難しいので、一方的に握られるだけとなったが、話は纏まった。

「で、いつ出るんだ？ ちゃんと計画立てていったほうが楽だとは思っぞ」

「うん。準備とかいろいろしなくちゃいけないから、明後日以降にしようかって思ってる。何処に行くかもその間に」

「分かった。そのくらいが妥当だろ」

そう言い、ハーデンふと窓の外を見た。

いつの間にか陽は傾き、空は夕焼けに染まり始めていた。あまり長々と話していた気はしなかったのだが。

「準備は明日辺りから始めよう。俺も手伝うから」

「ありがと。助かるよ」

「気にするな。じゃ、俺はそろそろお暇いとまするよ」

彼はそう言い、立ち上がる。

その時だった。コトリ、と彼の探検隊バッジが落ちる。ローラがすぐにそれを拾い、手渡した。

「落ちたよ。はい」

「ああ、スマン」

差し出されたバッジを口で銜え、もとの場所へ戻す。

「じゃ、また明日な」

「うん。またね」

挨拶を交わし、ハーディンはローラの家を後にした。

彼の姿が見えなくなるまで、ローラはずっとハーディンを見送っていた。

E x p l o r a t i o n ・ 5 準備は計画的に（前書き）

遅れて申し訳ございません。年内に更新できるよう、なんとか間に合わせました。

Exploration・5 準備は計画的に

ハーディンに自らの意志を話した翌日

「ええつと。まず……」

ローラは早速準備に取り掛かった。時刻は午前十時過ぎだが、ハーディンはまだ来ていない。

まず何処へ行くのか。そして、それに必要な物は何か。さらに順路、大凡の日程、予算、緊急時の対応etc……。決めなければならぬ事は沢山ある。

テーブルの上に大きな世界地図と、幾つかの本を並べ、まずは順路と行き先を決めていく。ハーディンの意見も聞かなければいけないので、“候補として”だが。

彼女が参考にしたのは、ハーディンがくれた本の、こんな一文。

*

上記の図とデータから分かるように、原因不明の災害は東大陸でもつとも多く、西大陸では少ない。中央大陸では技術が発達しているため復旧は今のところ間に合っているらしい。

だが、問題は東大陸だ。他の大陸と比べて科学技術や文明レベルが低いこの地域は、大きな被害が出ると復興や救助に多大な時間がかかる。それだけでなく、ライフライン、今回の事態で一番の被害要因である地震に対する建造物の耐震性の低さも問題だ。一度大きな地震が起これば、たちまち東大陸は混乱に陥る。既に震度五強の揺れに襲われたデータもあるので、救助活動やこれらの問題に対す

る早急な解決、もしくは対策が急がれる。

かといって、すぐに動ける訳ではない。被害が出ているのは世界規模であるのはお分かりであろう。その為、“WPMO国際救助機構”や“レンジャー世界平和維持機関”も人員不足になっており、ボランティアを募るにも、素人がやるのでは被災者が増えかねない。

多くの探検家を抱えている“ポケモン探検隊連盟”は、世界中の探検家や探検隊に協力を呼び掛けている

*

東大陸は、西大陸のさらに西側に位置する大陸。上の抜粋にも記されていた通り、他の大陸 中央大陸や西大陸と比べて科学技術というものがあまり発達していない。

探検家の出身率が非常に高い大陸でもあるのだが、彼らも被災者であるために動ける者は少ない。つまりは 今、助けが必要な場所。

放っておけない性格の彼女が、それを見過ごすなど出来るはずがない。

行くべき場所は、決まった。

と、そこへハーディンが家のドアをノックし、「入るぞ」とだけ言って彼女のいる部屋へやってきた。

「悪い。ちょっと遅くなつた」

「ううん。気にしてないから。」

別に早く来なくてもよかつたのに「

「いや。お前の事だから、一匹であれこれ考えそうだったからな。やることもあるだろうし、少しでも早く来た方が早く終わると思つて。」

行き先、もう決めたのか？」

テーブルの上に広げられた地図を目で指し、次にローラにそれに移した。

「決めたわけじゃないけど、ここならどうか、って場所はあつたよ。」

ホラ。東大陸は被害が多いって言うし、それに、何か情報もあるかもしれないよ？」

「確かに、な。だがその分危険もあるぞ。あつちは治安も悪くなつてるらしいし、感染症だつて流行つてるって聞いたぞ。大丈夫か？」

治安、環境、ともに悪い 安全面はともかく、悪い環境は、性別的にもローラにとっては苦手かもしれない。

ハーディンはそう思ったのだが、ローラから帰ってきたのは、彼女らしい返答だった。

「そんな事、一々気にしてられないよ。向こうには困つてる人^{ポケモン}がたくさんいるんだから、今すぐにでも助けてあげなきゃ。」

それに ハーディンもついてるでしょ？」

「嗚呼。そりゃそつだ……。って、どつという意味だそりゃ？」

「え、べ、別に深い意味はないよ？」

その言葉が真か偽かは分からないが、暫くハーディンは動揺することとなった。

「ま、まあいい。行き先は決まったんだから、後は荷物とか道とか……」

「あつ。ルートなら大丈夫。ここから北北西に行つたところに港町から、向こうに行く帆船が出てるから」

地図の左寄り 『Ocean Village』と書かれた町を指す。

東大陸に最も近い町で、向こうに行く船も多数出ているらしい。

「一日に何隻も行き来してるから、特に時刻とかは調べなくて大丈夫と思う。料金も結構安いらしいよ」

「ちょっと待て。何で“翼”があるのに空を飛んで行かないんだ？」

確かに、その通りだ。わざわざ船を使わなくとも、空を飛んでいけば一直線に目的地に行くことが出来る。

だがそこには、ローラなりの考えがあった。

「たまには船旅もいいでしょ？」

大丈夫。オーシャンヴィレッジまでは飛んで行くから」

船旅をするのもいいんじゃないか ローラはそう言った。

船など、少なくとも数年は乗っていない。

翼を持つ種族所以、普段は陸より空を移動することが多い。たとえ海を渡るときでも、長距離でもない限り船は利用する機会がない。

「まあ……そりゃそうだな。潮風感じるのもいいかもな」

「そうだよな。じゃあ……後は荷物、かな？」

行き先、道順、次は荷物。予定にもよるが、行き先が行き先なので準備は大切。

備えあれば憂いなし。万が一に備えて、しっかりと荷物はそろえておかなければならない。

「とりあえず、家に何がある？」

ハーディンがローラに聞くと、彼女は家にある、持っていけそうなものを次々と述べていく。

だが、その内容は木の実や食糧などが殆どを占めていて、とても足りそうにない。

「と、それぐらいかな」

「い、いくらなんでも足りねえだろ……」

「そんなこと言ったって……普段から遠出することなんてないんだから、そんなに準備してないよ」

尤もな話だ。いくら探検家だからと言って、いつもあちらこちらを飛び回っているワケではない。

「とにかく、それなら買い出しに行かなきゃ駄目だな。買うものの紙にまとめて、行こうぜ」

*

「向こうの地図に、薬……。
あつ。携帯食も買わなきゃ」

家から少し離れた位置にある、大きめの商店。様々な商品を取り扱っており、大抵の物はここで手に入る。

手に持ったメモ書きを見ながら、一つずつ記されたものを買ってカゴに放り込んでいく。

ちなみに、買い出しで買うものを指示したのはハーディンである。

あれでも計画的に物事に取り組むタチなので、あらゆる場面を想定して準備物を検討したらしい。

『まずだな、食べ物が一番に考える。寝床は野宿でも間に合う。だが食べ物はどうにもならない。探せばあるかも知れんが見つからないけりやそれで終わりだ。』

だから、持ち運びが簡単で長持ちする携帯食や保存食がいいぞ。もう一度言っぞ、携帯食と保存食だ』

と、念を押して言ってきた。

続いて“念を押しして”指示を出してきたのは、木の実。

『次は木の実だ。薬も多少はあったほうがいいが、実用性を考える
と木の実が断然良い。』

薬は、飲むだの塗るだの使い方が色々あるが、木の実は“食べる”
だけだ。状態異常の回復にも使えるし、小腹が空いたときに腹を
満たすことだってできる。他にもだな……』

他にも と、だらだらと蘊蓄うんちく混じりの話（ワケの分からないものもあつたが）を続けられ、途中で中断させた。とにかく、役に立つのは分かった。

「木の実、木の実……あれ？」

必ず買え、とハーディンに言われていた木の実を探していたローラだが、何処を探しても見つからない。

何処にあるのかと店員のクレイハナに聞いたところ

「申し訳ございません。先ほど、料理教室の先生がまとめ買いをされて……」

売り切れてしまったらしい。

*

「……で、無かったから知り合いの木の实屋に言ってるってワケか」

「うん。そっちは、買うものかえたの？」

ないものはさすがに買えないので、近くにある“知り合いの木の实屋”に向かおうとしたローラ。その途中でハーディンに会い、話をしながらそこに向かっているところだ。

「嗚呼。あと個人的に、ランタンと固形燃料と……」

「い、いいから。別に説明しなくても……」

ランタンと固形燃料なんて……。別にキャンプに行くわけじゃないのに。

いつからアウトドアになったのだろうと、そんな事を思っているうちに、その店の前までやってきた。

少し小さいその木の实屋は、店の大きさとは裏腹に様々な色合い、大きさ、種類の木の実が並べられていた。ポピュラーなオレンの実から、ちよつと珍しいカイスの実まで。

お気づきかもしれないが、そう。ここは先日、ローラが“樹海の森”で助け、後日依頼を引き受けた“あのオオタチ”の店。

さつき行つた商店とここ以外に、木の実を取り扱っている店はま
ずない。“樹海の森”から取ってくるという手もあるが、それでは
手間がかかる。

そこで、依頼などで関係が出来たオオタチの店を利用しようと思っただ。

と、そんなワケでここを訪れたのだが、肝心の店主オオタチの姿が見えない。店は開けっぱなしなので、閉店、ということはなさそうなのだが……。

「おい。店主がないのに開けっ放しするのはどどういうワケだ？」

呼んでみるか、とハーディンが言おうとした時、店の奥から一人影　もといポケ影が現れる。

細長い、ベージュと茶の縞模様の身体を持つポケモン　オオタチが、短い足を忙しく動かしながら出てきた。

「あっ、ローラさん。

……と、そちらの方は？」

ローラの横に居る、見慣れないボーマンダを見てオオタチは、ローラに誰かと聞いた。

彼女の代わりに、見慣れぬボーマンダ、ハーディンが答える。

「俺はハーディン。ローラの親友で、見ての通りボーマンダだ。

あ、別に突然引っ掻いたり、噛みついたりなんかしないからな。そんな怖がらないでくれよ」

ボーマンダは見ての通りこの強面。本人の意思とは関係なしに、相手に恐怖感を与えてしまう。さらにこの爪や牙も、相手を傷つけるには十分すぎる威力を持つ。そんなところをみて、オオタチは無

意識のうちに恐怖感を抱いていたらしい。

尤も、ハーディンにそんなつもりはないのだが。

「で、ですよ。……なんか、すみません」

もしかすると、相手を傷つけてしまったかもしれない。そう思ったのが、オオタチは軽く頭を下げ、謝罪した。

「気にするな。こんな顔していると、嫌でも怖がられるよ。今まで何度同じこと言われてきたか……」

「ハーディン。嫌味言うのはやめて」

「な、何がイヤミだ！ 事実だろ！

お前だって、俺がボーマンダこんのになった時は怯えてただろ！」

軽い言い合いになってしまったように見えるが、これはただのじやれ合いのようなもの。

そこへ、オオタチが口をはさみ

「あの……ご用件は？」

『あ……』

本題に入った。

Exploration・6 木の実屋のご主人（前書き）

今年初の更新です。急ピッチで仕上げましたので、文章、量が少なめです。

Exploration・6 木の実屋のご主人

「今日はね、木の実を買いに来たの。ちょっと遠出するから、沢山必要になって。」

それで町の商店に行ったんだけど、売り切れちゃってて……」

「売り切れ……？ ああ。もしかして、近くでやってる料理教室のまとめ買いで？」

「」名答。

どうして分かったの？ とローラが聞くと

「あそこの教室は、木の実料理を作ることが多いんですよ。週二回ありますし、ときどき僕のところにも注文が来ますから」

と……とらしい。

そのとき、どこからか大きな声が聞こえてくる。足音とともに迫ってくるそれは 刃物のような腕を持つ虫い似た姿 コトロックと呼ばれるポケモン。

鋭い腕を大きく振り、息を切らせてこちらに走ってくる。

「はあっ……はあっ……きゅっ!？」

あまりに急いでいて、足元に注意を払っていなかったためか石に躓き、勢いよく顔面から地面にダイブすることに。

「あっ！？ ベルさん、大丈夫ですか！」

コトロツク ベルのもとへ、オオタチが急いで駆け寄る。名前を知っている辺り、ある程度は関係があるらしい。

「は、はい……って、いけない！ あ、あの……いつもいつもで、申し訳ないんですけど……」

「分かってますよ。今日は、何を？」

バツが悪そうにしているベルに、優しいな笑みを浮かべて問いかける、オオタチ。

「えっと……ラムの実を五個……」

相変わらずの申し訳なさそうな顔で、ベルは木の実を注文する。そんなやり取りを、ローラとハーディンは一言も発さずに見ていた。彼女が誰なのか、オオタチとの関係は、そして “なぜ” “こんな状態” なのか。

聞きたかったが、この様子では聞けそうもない。もうしばらく様子を見ることに。

「はい。ラムの実が五個ですね。千五百ポケです」

店の陳列棚に置かれた多種多様な木の実から、ラムの実五個を手にとって紙袋に入れる。そしてそれをベルに手渡し、代わりに代金

を伝えた。

「えっと……コスさん。いつも、すみません……」

ベルは大袈裟なまでに、深々と頭を下げ、代金の千五百ポケを渡す。そして両手で紙袋を受け取り、もう一度頭を下げ、小走りですべてきた方向へと去っていった。

「い、今のは……?」

タイミングを見計らい、オオタチ　ベルが“コス”と呼んだへ先ほどの出来事を問う。色々と、分からない事があつたから。

「さきほどの方ですか？　あの方は、さっき話した料理教室の先生で、ベルさん、という方です。」

ただ　こんなこと言うと失礼かもしれませんが　すぐく、ドジなんです」

確かに。彼女を見ると、大方そんなところだろうと予想は出来る。現れるや否や、躓いて転倒するなど、その表現はまさに“お約束”と言つても間違いではない。

「走ると転ぶことが多くて……買い物でも、ほぼ毎回、買い忘れをするらしいんです」

オオタチ曰く、ベルはかなり“ドジ”の度がキツイとのこと。まとめ買いでも当然買い忘れはあるらしく、その都度オオタチの店へ

走りながらやってくるといふ。

その頻度は一週間に一度、それもほぼ毎週で、回数を重ねることに罪悪感が募り、結果的にあのような接し方になったそうだ。

と、彼女の^{ベル}ことも知りたかったのだが、本当に聞きたかったのは、別の事。

「それもあるんだけど。さっきあなたの事を、コスさんって……」

本当に疑問に思っていたのは、“コスさん”の方。“オオタチ”が彼の本名だと思っていたローラは、それがどういふことか気になっていた。

それを聞かれたオオタチは

「あつ。そつち……ですか？」

と、少し声と表情が変わる。

聞いてはいけないことだったのか、とローラは一瞬不安になったが、次の言葉でそれは振りはらわれた。

「何ていうか……その、すみません。今更ですけど、僕、本名はコスなんです。本当にすいません。自己紹介、遅れちゃって……」

言われてみると、今まで「僕の名前はオオタチです」とは一言も言っていない。彼女自身が一方的にそう思っていただけに過ぎず、彼は本名をまだ言っていないかったのだ。

「べ、別に謝らなくてもいいよ。……だから、頭上げて？」

自己紹介をされていなかったことについては、ローラは全く気に

しない。

九十度ほど頭を下げているオオタチ　　コスに、謝罪をやめるよ
う言い聞かせる。

「おい、ローラ？　　買い物どうしたんだ？」

「あ……」

そう。自分たちは謝ってもらったために来たわけではない。荷物で
必要なものを調達するために、買い物をしている真つ最中だった。

ハーディンに言われなければ、このままさようなら、と別れてい
たかもしれない。

「おいおい、しっかりしてくれよ。お前はときどき、抜けてる事し
てたんだから」

最後に「あのコトロツクほどじゃないがな」と付け加え、呆れた
ように溜息を吐く。

過去形なのは、会っていなかった三年間の間に直っているかもし
れないと思ったからだ　　この様子から察するにその可能性は低い
が。

「ま、まあ……それも愛嬌って事で、いいんじゃないかな？」

ところでコスさん。どんな木の実があるの？」

ハーディンの言葉を適当に流し、ようやく本題に入る。

「はい。いろんな木の実を取り揃えていますよ。先日ローラさんが集
めてくれた事もあって、量もそれなりに」

「……ってことらしいけど、なに買えばいいの、ハーディン？ こういうのはあなたが詳しいでしょ？」

長々と蘊蓄を語ることのできるハーディンに、品物のチョイスをバトンタッチ。

「任せな。まず必需品からだ。」

絶対に必要なものは、毒や火傷、マヒその他様々な状態異常を回復する、モモンやチーゴ、クラブの実とかだ。これらの木の実は、ポピュラーで尤も手に入りやすい部類に入る。また、ラムの実ならどの状態異常にも効くから便利だぞ。

次、これも絶対に必要だ。傷や体力を回復するオレン、オボンの実は探検活動だけでなく、日常生活でも役に立つ。こいつらも手に入りやすいから、余裕がある限り買っとけ。

もうひとつ、俺たちの苦手なタイプに対する対処法だ。俺たちはドラゴン・飛行タイプを併せ持つから、氷タイプの技には極めて弱い。だから、氷系の技のダメージを半減するヤチエの実には保険として持つといた方がいいぞ。

と、基本はこんな感じだ。金に余裕があれば、もっと買ってもいい。例えば……」

やはりというか、始まった。蘊蓄混じりの話が。

放っておけば延々と語り続けるであろうハーディンを半分無視し、とりあえず指定された木の実をコスへと伝えていく。

それなりの量があるので、コスは何処からかペンとメモを取り出し、一つ一つ書き取っていく。

「それと、ヒメリの実もなかなか使えるぞ。これは技を使うのに必要なエネルギーが切れた時に、エネルギー補給として使うことができる。大体十回分……くらい回復するな。まあ、“ピーピーマ

ックス”と同じ、じゃないか。似たような物だ。さらに」

無視されていることにすら気付かず、木の実について語り続けているハーディン。

「す、凄い知識ですね、ハーディンさん……」

「なんていうか、まあ……」

ノンストップで口を動かし続けるハーディンを見て、コスは思わず啞然とする。木の実を扱う店を営んでいる彼でも、ここまで熱く語る事は出来ないようだ。

大きな紙袋を受け取り、代わりに代金を渡したローラも、それには同意。彼の事はよく知っているが、口を止めずにここまでペラペラと話し続ける彼は見たことがない。それだけハーディンの知識が多いのだろうか。それとも一方的に偏っているだけなのだろうか？

とにかく、買う物は買ったので次の行動に移らなければ。このまま彼を話させ続けるワケにはいかない。

「ハーディン、終わったよ。ねえ、聞いてるの？ ねえってば。……いい加減にして」

何度言っても気付かないので、声をドスの利いた、強いものにしてみた。すると

「……ん、ああ。何だ？」

気付いたのはいいが、彼女の話は殆ど聞いていない様子。

呆れたようにもう一度説明すると、「あ、そうか」の一言。どうも彼らしくない、と思うローラだった。

*

「悪い、悪い。話し始めると止まらなくてさ」

「もう。私に抜けてるって言うくせに、あなたも変わらないじゃないかい」

「ま、まあ。お互い様ってことで……」

どうやらハーディンは、“アレ”を指摘されるのが苦手らしい。

そんな会話をしつつ、二匹はローラの自宅へと向かっていた。準備物の買いい物はあの後も続き、時刻は陽が真上を通過したころ。ローラは両手、ハーディンは背中に沢山の荷物を抱えており、ハーディンに至っては、落とさないように器用にバランスを取っている。

「……で、どうする？」

「ん、何が？」

突然、話題を変えたハーディンにローラは疑問の表情を浮かべる。

「準備、一日に終わっただろ。出発は予定通りか？」

そういえば、そうだ。

本来の予定では、二、三日で準備を済ませ、その後に出発 という風に計画を立てていた。だが予想以上にそれが早く終わり、その気になれば今日にでも出られる状態 さすがにそれはしないが。

「うん……じゃあ、明日、出る？」

「……まあ、それでいいんじゃないか？」

「な、何で聞き返すの？」

とにかく、出発は予定を早め、明日ということになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1351x/>

Lora's trip

2012年1月12日01時59分発行